

定例研究会のご案内

東洋音楽学会関西支部 第158回定例研究会・日本音楽学会関西支部 第237回例会
(今回は日本音楽学会支部例会と合同)

とき 1992年4月25日(土) 13:30-17:00

ところ 大阪音楽大学K号館 403教室
〒560 豊中市名神口1-4-1 TEL 06-865-0545

13:30-14:20 【研究発表】

『京劇老生唱腔のリズム的特徴』

— 京劇唱腔のリズム構造と馬連良のリズム的特質』

発表者: 田中伸子(大阪音楽大学大学院修了)

14:20-15:10 【研究発表】

『「世俗化」とD.Schnebelの宗教的作品(仮題)』

発表者: 秀村冠一(神戸山手女子短期大学)

— 休憩 —

15:30-16:00 【報告】

『第15回IMS(マドリッド)に参加して』

報告者: 津上英輔(同志社女子大学)

16:00-16:50 【研究発表】

『銅鼓のコスモロジー』

発表者: 朱家駿(大阪大学大学院)

司会: 網干毅(大阪音楽大学)

会場(東洋音楽学会): 渡辺浩子

東洋音楽学会関西支部 第159回定例研究会

とき 1992年6月13日(土) 14:00-17:00

ところ 大阪大学 文・法・経済学部研究講義棟1階 視聴覚(文13)教室
〒560 豊中市待兼山町1-1 TEL 06-844-1151 内線3251(山口研究室)

交通 阪急宝塚線「石橋」下車、徒歩約12分、または「蛍池」よりタクシー約10分

14:00-14:50 【研究発表】

『唐までの詩賦にあらわれた音の美』

発表者: 中小路駿逸(追手門学院大学)

— 休憩 —

15:00-17:00 【連続講座】

シンポジウム『日本劇場音楽研究の過去・現在・未来』

パネリスト: 山田智恵子(大阪音楽大学)

茂手木潔子(上越教育大学)

司会: 瀬山徹(大阪芸術大学)

会場: 高岡結貴・田井竜一

「義太夫節の音楽学的研究」

山田智恵子

義太夫節は、これまでテキストとしての浄瑠璃の文学的研究、あるいは演劇学的研究が主として行われ、語り物音楽・三味線音楽として音楽学の分野で捉えた研究はまだあまり多くない。テキストとしての浄瑠璃の翻刻は明治初頭からはじまり、影印併載の『近松全集』をもって、丸本の忠実な翻刻としてその頂点をきわめたといっても過言ではない。芸談の類も、『浄瑠璃素人講釈』をはじめとして、近年の演者たちが相次いで刊行しており、その情報量はかなり多いといえる。さらに、『義太夫節の曲節』『日本古典音楽体系・義太夫』など、レコードの解説も義太夫節研究に寄与するところが大きかった。

そうした文字情報や演奏情報の豊富さにもかかわらず、音楽学の分野での研究がそれほど進んでいないのは、義太夫節の視覚化の困難さにあるといえる。つまり、義太夫節は、演奏そのものを伝承してきたのであって、文字譜や朱は記録の補助としての機能しかなく、音楽を再現できる楽譜ではないのである。そのため、音楽そのものにアプローチしようとするれば、何らかの方法で視覚化する必要が生ずる。私自身は、五線譜に採譜するという、労の多い方法を用いてきた。

今回は、その問題の手掛かりとなるかもしれない、新しい研究の動向について報告し、あわせて今後の展望についてもふれたい。

「歌舞伎音楽研究の過去・現在・未来」

茂手木潔子

歌舞伎音楽の音楽学的研究は意外に少ない。先駆的な研究者としては、浅川玉兔（長唄・三味線）、藤根道雄（豊後系浄瑠璃）、望月太意之助（下座音楽）の名が挙げられよう。現在は研究者層も厚みを増し、演奏家自身による研究も増えている。従来は曲種ごとの研究が中心で、長唄と陰囃子（下座音楽）に焦点を当てた研究が多く、清元や常磐津が若干、義太夫節（竹本）に関してはその音楽学的研究はほとんどない現状である。

今回の発表を契機に、これまでの歌舞伎音楽の研究状況とその傾向をあらためて概観すると共に、音楽学的研究の視点から今後望まれる研究について発表者なりに考察し提案したい。

今後、曲種ごとの音楽学的研究の発展をより一層望む訳だが、これからの研究の方向の一つとして、歌舞伎と言う演劇の中で様式の異なる音楽がどのように混じり合っ（歌舞伎音楽らしさ）を作っているか、といった総合的な視点も重要であろう。この研究によって、歌舞伎という芸能の本質的な特性を音楽の面から明らかにできよう。歌舞伎の義太夫節（竹本）の音楽的特性の研究もその一つである。人形浄瑠璃の義太夫節と歌舞伎の義太夫節の音楽的特性には、奏法・旋律法などに顕著な違いが見られる。歌舞伎に取り入れられた義太夫節の変容-----この研究は、歌舞伎の音楽的特性と同時に義太夫節の本質的な特性を新しい観点から探ることになる。また、下座音楽については、様々な楽器の楽器学的研究が早急に望まれる。

最後に、演奏者の語った「芸談」も日本音楽の伝承法を探るうえで興味ある題材となる。

プライベートな旅のときに風景や人々を分析的にみている自分がある。いや、日常生活においても、その場にとけこめずに一歩ひいていることが多い。こうした「路上観察学」的な視線は、数回のフィールドワークのときのものに似ている。

「フィールドワーカーは、先入観念で諸文化事象を考察してはいけない」ということがよくいわれる。わたしは、とりあえず目の前の事象を説明づけたいという知的好奇心で、これまでフィールドワークらしきものをいくつかおこなってきた。そこでは、自分の生まれ育った環境を誇りをもってうけいれ、そのなかで主体的に自己を確立していこうとする人々と、生き生きと伝承されている芸能にであった。わたしは、そうした生きかたにあこがれ、うちのめされると同時に、なんにも自慢する特技もなく、街で一人ぐらしをしている自分にあきれてしまった。わたしには、当該文化に対する先入観念どころか、自分の文化に対する理解もない。

しかし、わたしはたしかにここでこうして生きており、多くの人々が都市を生活圏として選択している以上、自分の研究のフィールドを「都市」にせざるをえないのでは、とも思う。ならば、このアンビバレントを無視するわけにはいかない。フィールドワーカー的な、すなわち客観的に分析する視線は、現在多くの人々が持ちあわせている（ただ「ほんもの」を体験した人が少ないだけだ）。分析する対象は、みずからをも含まれており、その結果として、自己演出能力が獲得されている（カラオケなどは好例であろう）。

タイトル中のマークは「ひやあせをかいている人の顔」である。こうした「文字絵」とでも名づけられるであろうマークは、コンピュータネットワーク上の文章中に散見できる。これを自己表現に対するみずからによるコメントとしてとらえれば、自己の相對視の一事例として位置づけられよう。

時間的に移動するフィールドワーク

南谷美保

フィールドワークを、「野外あるいは実験室外の作業、仕事、研究。現場または現地での探訪、採集。」（『広辞苑』）と解釈するならば、私のように、専ら「屋内」でちまちま史料調査をしている人間に、フィールドワーク・レポートなどものする資格はないであろう。しかしながら、私は、空間的移動を前提としている上記の定義に対し、文献史料を漁って時間的に移動して作業を行なう場合もフィールドワークの一種と解釈できぬことはあるまいと勝手に決め込んでいる。

「雅楽とは、また雅びなものをおやりですな。」これは、私が雅楽を専門にしていると口にすると、相手から返ってくる決まり文句である。これに対する私の決まり文句は、「とんでもない。私がやっているのは雅楽の音楽そのものではなくて、その音楽を演奏していた人間がどのように生活費を稼いでいたかということですから。」というものである。すると大抵の場合は、「そんなことが音楽の研究になるんですか？」と尋ねられ、こちらが、「-----。」となるのもいつものことである。

しかし、いわゆるフィールドワークの調査報告が、もはや「行った、見た、聴いた、こうだった」というものではありえないと同様、歴史史料を扱って音楽について云々する場合も「読んだ、こんなことが書いてあった」では、いささか心許無かろう。

音楽を歴史的に考察する場合においても、音楽そのものの研究とともに、さまざまな史料を縦横に組み合わせ、これを基盤として、当時の演奏家たちが、どのような社会的状況のもとでどのような生活を送っていたのかを明らかにするような、いわば、彼らの生きざまを擬似体験させてくれるような研究も必要であるのは自明のことである。

このように考える時、史料調査もフィールドワークであると、私は思うのである。

沖縄地区情報

◆沖縄地区研究会報告

第4回定例研究会 1991年11月30日(土)

- ・研究発表「三線と左手と三味線のかかわり」 大塚栞子(沖縄県立芸術大学)
- ・報告「宮古のあやぐについて」 富浜定吉

第5回定例研究会 1992年2月29日(土)

- ・研究発表「三線古典音楽の節名における『音』と『本』」
金城厚(沖縄県立芸術大学)
- ・研究発表「フェーヌシマ芸能の音楽」
比嘉悦子(琉球大学)

内容の概略は「沖縄地区通信 No.4」(2月15日刊行)、「同 No.5」(6月1日刊行予定)に掲載されます。

◆沖縄地区定例研究会の開催予定は以下の通りです。

第6回定例研究会 1992年6月20日(土) 会場:沖縄県立芸術大学
講演:宮原卓也、研究発表:祖慶剛、山本宏子

第7回定例研究会 1992年9月~11月 会場:(同上)

第8回定例研究会 1993年2月下旬 会場:(同上)

◆沖縄地区例会では、沖縄地区以外の会員の発表も受け付けています。

問い合わせ先

〒903 那覇市首里当蔵町1-4 沖縄県立芸術大学音楽学部 音楽学学科室内
東洋音楽学会沖縄地区連絡会 098-831-5034(加加)・5044(カダ)

編集室より 編集担当 廣井榮子

「支部だより」第11号で予告致しました第158回定例研究会の日時が変更になり、日本音楽学会との合同になりました。ご確認の上、おかけください。また、今回予定していた連続講座は発表者の都合により、12月例会に移行致しました。ご了承ください。

なお、連続講座は1992年度の第157回から、できるだけ演奏家をお招きして内容充実を図っていく予定です。

お忙しいなか、原稿をお寄せくださった皆様、ありがとうございました。また、連絡・通信などでさまざまな方面からご協力いただき、ありがとうございました。お礼を申し上げます。

関西支部役員の変動

尾野尉子(総務・経理)……辞任。岡部芳広(例会・広報)……桜井寛に交替。

支部関係の問い合わせ先

関西支部 〒559 大阪市住之江区南港中4-4-1 相愛大学音楽学合同研究室内
TEL 06-612-5900 内線331

定例研究会・支部だより

〒657 神戸市灘区鶴甲3-11 神戸大学教育学部岩井研究室
TEL 078-881-1212 内線7238